

東日本大震災 明日への 掲示板



合唱の練習に励む米の生徒たち(24日、宮城県気仙沼市で)

米高校生、被災地と交流

米国マサチューセッツ州の高校生11人が24日、宮城県気仙沼市を訪れ、地元高校生と交流した。

震災遺児らの支援団体「ビヨンドトゥモロー」(東京)が被災地の現状を知ってもらおうと企画。米国の生徒は、「津波はどんなものなのか」「今大変なことは」などと質問。気仙沼の生徒は、被災体験や今の暮らしぶりを答えた後、英国人音楽家のジュリアン・レノンさんとニック・ウッドさんが被災地を思っただ曲「HOPE」を一緒に合唱した。東陵高2年、遠藤亮子さん(17)は「遠くで被災地を

思ってくれる人たちがいるなんて」と笑顔で話した。

被災体験聞く

米国の東陵高で交流

日本の文化を学んで
いるアメリカのホスト
ガールズクラブの中



東陵高生と交流するアメリカの中・高生たち

高生たちが24日、東陵高校の生徒たちと交流。学校生活を見学したり、被災した生徒の体験談などに耳を傾けた。被災した高校生が伝

道師役となり、被災や復興の情報発信を行う「ピヨンドトゥモロー・アンバサダープログラム」の一環。同クラブの14、18歳の生徒たちと、同校の生徒11人が交流した。

校舎や部活動の様子を見学したアメリカの生徒たちを前に、3年の木皿圭祐君が「交通手段や連絡が取れず、1週間後に自宅のある南三陸町に帰った。何もかもが無く、想像を絶する被害に呆然とした」と報告。

藤本朱子さんは「震災直後に被災者が次々に避難してきたので、ボランティアに汗を流

した。友達と毛布1枚でその日の夜を過ごし、たーなどと震災当時の状況を語った。アメリカでの震災に関する報道は、福島第1原発のは、市民とも交流した。状況がメーンで、津波被害の報道は少なかったという。

ワーシユ・マックさん(17)は「震災に負けずに笑顔で過ごす

みなさんの姿に、心を打たれた。ポストンに帰って、気仙沼の現状を伝えていきたい」と話していた。この日は、市民とも交流した。一行は、25日まで滞在し、被災した高校生から直接被災地を案内してもらった後、体験を発表し合った。